

2026 年 9 月 20 日（聖霊降臨後第 17 主日、A 年特定 20）

メッセージ

「気前のよい神」

（マタイによる福音書 20:1-16）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音書に登場するぶどう園の主人は、夜明け、九時、十二時、三時、そして五時にも出かけて行き、労働者を雇います。「夜明け組」には一デナリオン、「九時組」にはそれなりの賃金を約束しました。働いた時間に応じて賃金が支払われるなら、丸一日働いた「夜明け組」が最も多く受け取るはずですが、最後の一時間だけ働いた「五時組」も、同じ一デナリオンを受け取りました。

夜明け組が不平を言いたくなる気持ちは、わたしにもよく分かります。しかし主人は「友よ、あなたに不当なことはしていない」と答えます。約束の賃金は支払われているのです。そして、「私はこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ」と言います。主人にとっての「正義」は、最後まで誰にも雇われなかった人たちにも、同じように与えることにあったのです。

もちろん、この「正義」を人間社会にそのまま当てはめることはできないでしょう。しかしこのたとえは、神がどのような方であるかをわたしたちに教えています。「私の気前のよさを妬むのか」と主人が言う通り、神は気前がよいのです。ご自分のものから惜しげもなく、わたしたちに与えてくださいます。神は、わたしたちの働きに対する「報酬」として救いを与える方ではありません。救いも愛も、すべて気前のよい神から「恵み」として与えられるものです。「最後の者」であっても、です。

このたとえは、「このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」と結ばれます。最後に来た者から賃金が支払われ、すべての者に同じ一デナリオンが与えられる。そこでは、先に来た者ほど多く受け取るはずだという、わたしたちの物差しが問い直されています。自分のほうが多く受け取るべきだという思いに捕らわれると、最後の者にも等しく与えたいという神の思いが見えなくなってしまいます。夜明け組も、約束された賃金を減らされたわけではありません。それなのに、最後の者と比べ、妬みが生じた途端、与えられている恵みが見えなくなりました。朝、仕事を得て、賃金を約束されたことは、喜びだったのではないのでしょうか。それが今は、不平不満に覆われてしまったのです。

しかし、主人の思い、主人の「正義」に目が開かれるなら、自分に与えられた恵みを、再び喜びと共に受け取ることができます。他の人に恵みが注がれても、自分への恵みが減るわけではありません。「あの人にも与えられてよかった」と、同じ恵みをいただいた者たちが喜び合える世界が、そこに開かれます。最後の者にも心を注ぐ神の気前のよさに目を向け、互いに与えられた恵みを共に喜ぶ者へと、導いていただきたいと思います。